HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市と農山漁村をつなぐ取り組みが人々にもたらす影響 ： 村おこしボランティアを事例に
Author(s)	佐々木, 健
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2026-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99142
Type	master thesis
File Information	sasakiken.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和７年度修士論文

都市と農山漁村をつなぐ取り組みが人々にもたらす影響

―村おこしボランティアを事例に―

文学院　人間科学専攻　地域科学研究室
指導教員：宮内 泰介
学生番号：13243085
氏名：佐々木 健

内容

1 研究の背景と目的 3

1-1 研究背景 3
1-2 先行研究 3
1-3 目的 5

2 研究対象の概要 6

2-1 村おこし NPO 法人 ECOFF の概要 6
2-2 村おこしボランティアの概要 6
2-2-1 村おこしボランティアの実施概要 6
2-2-2 村おこしボランティアの活動内容 7
2-2-3 村おこしボランティアの仕組み 8
2-2-4 村おこしボランティアの活動の流れ 9

3 村おこしボランティアが参加者に与える影響 11

3-1 調査方法 11
3-2 調査結果と分析 12
3-2-1 参加者に与える影響 12
3-2-2 学びとキャリア 13
3-2-2-1 知らない地域で暮らす 13
3-2-2-2 田舎暮らしやボランティアのハードルが下がる 14
3-2-2-3 視野を広げる 14
3-2-2-4 コミュニケーション力を鍛える 15
3-2-2-5 将来について考える 16
3-2-3 人とのつながり 17
3-2-3-1 参加者どうしのつながり 17
3-2-3-2 つながりをつくる要因 18
3-2-4 まとめ 21

4 村おこしボランティアの世話人に与える影響と NPO の果たす役割 23

4-1 村おこしボランティアの世話人に与える影響 23
4-2 村おこしボランティアにおける NPO の果たす役割 24

5 結論 26

謝辞 27

参考文献 27

1　研究の背景と目的

1-1　研究背景

日本の人口は、2008 年がピークであり、2011 年以降は毎年減少し続けている。特に地方においてはそれが顕著であり、2014 年に「ストップ少子化・地方元気戦略」（日本創成会議）、通称「増田レポート」にて「地方消滅」の可能性が示された際は、さまざまな議論が巻き起こった。さらに、2024 年の 4 月に人口戦略会議が発表した地方自治体の「持続可能性」分析レポートでは、日本全国の 43%にあたる 744 自治体が「消滅可能性自治体」であるとしている。これらを受けて、昨今は各自治体が移住政策に熱心に取り組んでいる。しかし、限られた人口を奪い合う「自治体間の人口獲得ゲーム」（山下 2014）との疑問が指摘され、移住ではない形で地域と関わる方法が求められている。解決策の一つとして、2016 年ごろからメディア関係者を中心に「関係人口」という新たな概念が提唱されるようになった（高橋 2016；指出 2016；田中 2017）。関係人口は新しい概念であるため定義に幅があるが、本研究においては田中による「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」（田中 2021）という定義を採用する。関係人口政策と移住政策は、内容が似通ったり、重なり合う部分もあるが、移住だけにとらわれない関わり方で、長い目で見たときの地域への効果に重きを置いているという点で異なると考えられる。そのため、関係人口を検討する上では、「継続」するという面は重要である。近年は、社会人や他の学生と比較して自由に使える時間が多く、将来的な関係性にも期待をした大学生へのアプローチは、行政や NPO などによって多く行われている。そこで本研究においては、大学生を中心とした若者を対象に関係人口を生み出す事業の一つである、村おこし NPO 法人 ECOFF が実施している村おこしボランティアに着目する。

1-2　先行研究

まずは、本研究に関わる先行研究をレビューしたい。ECOFF が実施している村おこしボランティアは、都市と地方を結び付ける関係人口創出がメインの目的であるが、参加する若者の教育プログラムという側面もあり、関わる研究は多岐にわたる。そこで、「関係人口の継続」「地方と若者を結び付けるプログラム（緑のふるさと協力隊）」「地域と教育」の 3 つに分けて先行研究をレビューする。

最初に、「関係人口の継続」に関する研究である。関係人口創出に資する取り組み、活動に参加した後の関係性の継続についての先行研究は、「移住」に着目したものが多く、継続的訪問とその要因に関する研究は多くない。継続的訪問についての研究は、山村留学終了後の地域への訪問頻度を調べた藤崎（2010）の報告、「緑のふるさと協力隊」後の再訪問や交

流状況を調べた泉・佐々木（2018）の報告、大学生の「地域づくりインターン」終了後の地域再訪に関する川見ら（2010）の報告がある。藤崎（2010）は、山村留学を終えた元留学生が、里親や山村留学センター職員などと会うために留学先を高い頻度で訪問している一方で、大人になってからの定住につながる可能性は低いと指摘している。泉・佐々木（2018）は、定住・非定住の境界は連続的（隣町に移住、派遣先に勤務など）であり、非定住であっても人に会うために、多くの OB・OG が直接訪問していると報告している。これら 2 つの報告は質問紙調査と単純集計に留まっている。川見ら（2010）の報告は、聞き取り調査をもとに、継続的訪問の要因を分析していて、再訪の要因として地理・拠点・活動共有時間・地域担当者継続・他事業との連携の５つを挙げている。また、活動を限定しない研究としては、田原・敷田（2023）の報告がある。インターネット上でのアンケート調査を実施し、交流人口から関係人口へ移行するプロセスを統計的に分析している。以上のように、関係人口の継続に関する質的な調査は十分にされていないと言える。

続いて、「地方と若者を結び付けるプログラム」についてである。本研究で研究対象とする ECOFF が実施している村おこしボランティアに関する先行研究はないが、類似したプログラムの一つとして、「緑のふるさと協力隊」がある。緑のふるさと協力隊は、NPO 法人地域緑化センターが実施している、「過疎化・少子化に悩みながらも地域を元気にしたい地方自治体と、農山村での活動や暮らしに関心をもつ若者をつなげるプログラム」[1]である。1 年間、農林業、学校での活動、地域行事など幅広い体験や地域貢献活動を行うもので、2009 年から総務省主体で実施されている地域おこし協力隊のモデルの一つとされる（飯干 2022）。緑のふるさと協力隊は、学術研究でも事例として多く取り上げられており、プログラムに関わる多様な立場からの報告がされている。飯干（2022）は、受け入れ地域の立場から報告している。緑のふるさと協力隊の開始初年度の 1994 年から毎年受け入れを行っている宮崎県日之影町を対象として、受け入れ自治体の立場として実施する意味と地域に与える影響について論じている。自治体として都市の若者を受け入れることで、まちづくりの活性化につながると同時に、外部から見た町の良さを町民に伝えてもらう意味があるという。地域の方にとっては、隊員の姿に刺激を受けたり、いろいろな若者と話すことで、地域の方が気づかない良さなどを聞けること様々な出会いがあるとしている。受け入れに際しては、隊員の自主性を第一にすること、隊員のやりたいことは全力でバックアップすること、役場職員との積極的なコミュニケーションを図ること、受け入れていただく地域の方との信頼関係を構築することの 4 つを大事にしており、これらが隊員と地域の方々の双方に良い影響を与え、継続的な受け入れにつながっている。橋本（2018）と山岸（2022）は、同じ緑のふるさと協力隊について、中間支援組織（NPO）の立場から報告している。山岸は、緑のふるさと協力隊の地域おこし協力隊との違いの一つとして、受け入れ自治体と参加する若者との間に中間支援組織としての地域緑化センターがある点を指摘していて、隊員の応募動機やその人

[1] NPO 法人地域緑化センター「緑のふるさと協力隊とは？」
https://www.n-gec.org/activities/furusato.html（2026/1/8 最終閲覧）

の特徴の把握と、派遣地域への職員の事前訪問を通じたマッチングが重要だとしている。橋本も同じく、中間支援組織の重要性を指摘しており、若者と地域の間に立って、手間を惜しまず双方のギャップを埋めることが必要だとしている。以上の「緑のふるさと協力隊」にかかわる先行研究を見ると、受け入れ地域、NPO（中間支援組織）の重要な意識や役割については多く論じられていることが分かる。その一方で、参加者視点での研究は多く行われていない。継続的な都市農村交流の実現のためには、受け入れ地域と NPO のほか、参加者に与える影響も考え、3 者の視点から検討していくことが重要だろう。

最後に、「地域と教育」に関わる研究をいくつか挙げる。山本（2020）は、一般の若者と佐賀県の NPO が実施する自然塾の卒塾生の若者を比較し、プログラムが若者の社会性に与える影響を検証している。卒塾生の若者の方が「個人的苦痛」が低く、「問題解決」、「トラブル処理」、「会話」が明らかに高かったことを示していて、その要因として、主体的で能動的に活動に取り組んだことが関係していると推察している。有川（2020）は、社会貢献を通じた学びであるサービス・ラーニングを通じて、大学生が「学生同士の人間関係」の中で成長し、「準備・情報共有」の重要性を学んでいるということを指摘している。また、須賀（2023）は、大学生のフィールドワークの事例を通じて、持続的な農村発展の観点からの地域連携活動のあり方について論じている。農村の自然や生活文化に触れる「交流」が地域愛着につながり、交流プログラムの構成要素として、生活を感じることができる風景、生業（農業）理解、生活理解、人的交流、地域の人との協働が重要であると指摘している。このように、地域や自然における教育プログラムの影響については、山本（2020）をはじめとした小中学生を対象としたプログラムが中心に扱われており、より年齢が上の大学生を対象とした研究は多く行われていない。また、大学生を対象とした研究の場合は、授業やインターンの一部として行われたものが扱われており、学校外での地域貢献活動が参加者にどのような影響を与えるかについては十分に検討されていないと言える。

1-3　目的

以上のことから、本論文においては、「村おこしボランティア」の取り組みがもたらす影響について、主に参加者の視点から、それぞれ短期的な目線と長期的な目線で明らかにする。特に、学び・キャリアや人のつながりといった観点に着目する。その上で、村おこしボランティアが受け入れ地域に与える影響や NPO（中間支援組織）の果たす役割も踏まえ、村おこしボランティアの意義について議論する。

2　研究対象の概要

2-1　村おこし NPO 法人 ECOFF の概要

研究対象である「村おこし NPO 法人 ECOFF」は、宮坂大智氏によって 2011 年 1 月に任意団体「村おこし NPO ECOFF」として設立されている。その後、同年 3 月にトカラ列島（鹿児島県十島村）中之島にて初のボランティアツアーを実施し、7 月に法人化され現在の特定非営利活動法人「村おこし NPO 法人 ECOFF」（以下 ECOFF）となっている。ECOFF は、「地域活性化を、誰でも参加できるものにする。」を使命としていて、主に「農林漁村と都市をつなげる農林漁家でのボランティアの紹介事業」（村おこしボランティア）を行っており、「農林漁村に有る“自然や文化”と不足している“人や産業”、都市に有る“人や産業”と不足している“自然や文化”を、人々が交流することによって埋め合わせ、農林漁村を活発にすることにより、自然と文化の保護に寄与する」[2]ことを事業内容としている。代表理事の宮坂大智氏は、大学時代のトカラ列島との出会いをきっかけに離島に関心を持ち始め、卒業後のオーストラリアでのワーキングホリデーなどを通じて、現在の「村おこしボランティア」の発想を得ている。

2-2　村おこしボランティアの概要

2-2-1　村おこしボランティアの実施概要

ECOFF が実施しているメインの活動が「村おこしボランティア」である。村おこしボランティアは、日本全国の離島や農山漁村で行う住み込み型のボランティアプログラムだ。「島にとけこむ、旅をしよう。」をコンセプトに、誰でも参加できる地域活性化を目指して取り組んでいる。北海道から沖縄まで、全国約 30 の地域（コースと呼ばれる）で実施しており（図 1)、期間は基本的に 9 泊 10 日（コースにより異なる、最短 4 泊 5 日、最長 10 泊 11 日）である。参加対象者は、主に 18～25 歳の学生で、そのため大学生の長期休みに当たる夏（8～9 月）と春（2～3 月）に実施している。1 シーズンに複数日程実施しているコースもあり、それぞれ A 日程、B 日程、C 日程…と称される。コースにより参加人数の上限は異なっており、少ないコースで 4 人、多いコースで 10 人となっている。なお、1 人でも申込があればプログラムを決行することになっているため、1 人で実施する可能性もある。2024 年度までに累計 3897 人の参加者が参加している。[3]

---

[2] ECOFF 組織概要　https://ecoff.org/about/mission（2026/1/8 最終閲覧）
[3] ECOFF 活動実績より筆者算出　https://ecoff.org/about/jisseki（2026/1/8 最終閲覧）

図 1　ECOFF が村おこしボランティアを実施している地域

2-2-2　村おこしボランティアの活動内容

ボランティアの活動内容は、地域の産業や特性に合わせており、農業や漁業、林業といった 1 次産業をはじめ、地域のイベントや教育、アクティビティ、環境、動物等さまざまである。体験できる可能性のある活動は提示されているものの、事前に具体的なスケジュールが決まっていないのが体験ツアーとの大きな違いである。これは、臨機応変に参加者の希望に応じると同時に、天候などに左右される地域の人の実際の生活を体験するという意味合いがある。期間中は参加者どうしでの共同生活が基本となり、自炊や洗濯、清掃などの家事全般を協力して行う（一部コースを除く）。以下に 10 日間の活動スケジュールの一例として、黒潮町 2022 春 A コースと三宅島 2023 夏コースのものを示す（表 1）。1 日目と 10 日目は、移動日を兼ねるため、本格的な活動日は中 8 日となる。多くのコースでは、地域散策（周辺観光、フィールドワークなどコースにより呼び方は異なる）の日が活動期間の前半に設けてあり（表 1 内の青字）、参加者にとっては活動場所を越えて地域全体を広く知る日となり、これにより地域への知見が深まる。また、休息日が 1 日以上設けられており、コースやそのときの参加者によって、世話人と一緒に観光をしたり、チームや個別で地域内の関心のある場所に行ったり、宿泊場所で休んだりする。一部のコースでは、世話人の意向で地域につい

て考える日が設けられている場合もあり（表 1 内の赤字）、これらのコースではより地域について考える時間が増え、地域活性化への貢献は大きくなると言える。

表 1　活動スケジュールの一例

黒潮町2022春A		
	午前	午後
1日目	ー	現地集合、オリエンテーション
2日目	きゅうり収獲・出荷	
3日目	周辺案内・観光、懇親会	
4日目	きゅうり収獲・出荷	レモン農園草取り、包丁講習会
5日目	肥料づくり	
6日目	フリー	
7日目	リバークリーン	塩づくり体験
8日目	きゅうり収獲・出荷	
9日目	きゅうり収獲・出荷	チェーンソー講習
10日目	ビーチクリーン	現地解散

三宅島2023夏		
	午前	午後
1日目	ー	フェリー乗車（フェリー泊）
2日目	現地到着、明日葉出荷作業	塩づくり
3日目	薪置き場づくり	薪置き場づくり/塩づくり
4日目	島内1周フィールドワーク	
5日目	三宅食堂手伝い/ゲストハウスDIY	
6日目	三宅食堂手伝い/ゲストハウスDIY	
7日目	島内運動会参加	フリー、運動会打ち上げ
8日目	自主企画	自主企画、ワークショップ
9日目	自主企画	自主企画、BBQ
10日目	掃除、出発準備	フェリー乗車、解散

2-2-3　村おこしボランティアの仕組み

各コースには、「世話人」と呼ばれる現地コーディネーターの役割を果たす地域住民（複数人のコースもある）がおり、ボランティア期間中は基本的に世話人の指示を受けて活動する（図 2）。世話人は、農業従事者やゲストハウス経営者、ツアーガイドなど職業はさまざまで、複数を掛け持ちしている人も多い。また、地元出身の人もいるが、都市圏や付近の都市から移住してきた人が多いのが特徴である。世話人の知り合いの農家や関係者のもとでボランティアをする場合もある。宿泊先は、世話人の自宅ないし世話人の運営するゲストハウスとなっているコースが多い。

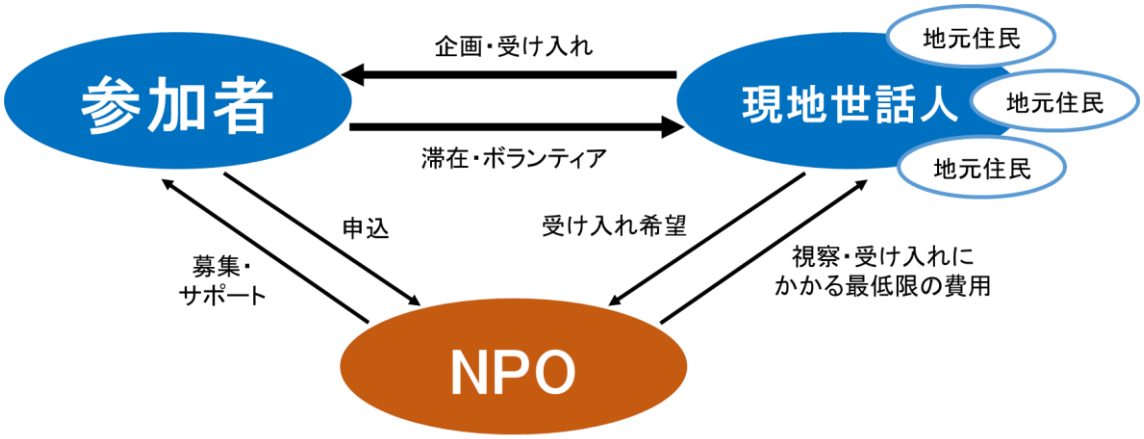

図 2　村おこしボランティアの仕組み

参加者は、参加費 46,000 円（9 泊 10 日の場合、コースによりそれ以外の費用が上乗せされる）を負担する。この参加費には、現地での滞在費と食費、旅行保険代、NPO の運営資金が含まれている。現地までの往復の交通費や、滞在中の娯楽費は別途自己負担となる。また、村おこしボランティアに一度でも参加したことがあるリピーターは、参加費が 3,000 円引きとなることもあり、複数のコースに参加する人が多いのも特徴である。現在では、各自治体が実施しているインターンやおてつたび、リゾートバイトなど、交通費や生活費を負担してくれたり、時給が発生するプログラムも多いが、ECOFF では補助金などに頼らず地域と NPO が持続的に活動していくために、参加費を徴収している。参加費を支払ってでも地域に行ってボランティアをしたいという高い意欲がある人のみが参加することとなるため、参加者の振り分けを行う一種のフィルターになっている。

2-2-4　村おこしボランティアの活動の流れ

活動は大きく「旅マエ」「旅ナカ」「旅アト」に分けることができる。3 つのパートそれぞれに分けて、プログラムの流れを説明する。

①　旅マエ

参加者は事前に 20 分ほどの動画オリエンテーションを受けて、プログラムの概要や参加にあたっての心構えを確認する。申し込みの先着順で参加者が決まり、書類や面接による選考がないため、このオリエンテーションもフィルター的な役割を果たす。任意参加のオンライン（一部対面）説明会や、インスタライブも実施している。申し込み・参加費振込後は、各自で現地までの往復の交通手段を手配し、郵送される「ボランティアブック」に書かれた持ち物リストを参考に準備を進める。また、各日程ごとの参加者と世話人、NPO 代表がメ

ンバーの LINE グループに参加し、当日までに自己紹介をしたり、分からないこと・不安なことの確認をする。参加直前には、送られてくるフォローアップのフォームに各自の参加の目的と、そのための 3 つの目標を設定し、参加に向けた意識を高めていく。

② 旅ナカ

参加当日、参加者は決められた集合場所に連絡を取り合いながら集合する。集合場所に世話人がいる場合もあるが、離島の場合は本土のフェリーターミナルが集合場所のことも多く、島に着いてから世話人と合流するコースもある。現地では、世話人の指示のもと、さまざまなボランティア活動に取り組む。10 日間のうち、1〜2 日フリーの日が設けられており、参加者どうしで決めて観光に行くことが多い。1 日の終わりには、「ボランティアブック」と「活動レポート」を毎日記入する。「ボランティアブック」は、事前に配布されるもので、日々の活動内容や感想を記録する。コースによっては、世話人が内容をチェックする場合もある。「活動レポート」は、毎日参加者が交代でオンライン上のフォームに記入するもので、ECOFF の公式 SNS（インスタグラム、X）と公式ホームページの「島々体験記」と呼ばれるブログに一斉に公開される仕組みになっている。

③ 旅アト

参加後は、送られてくる「ふりかえりフォーム」を記入して、10 日間の振り返りをする。基本的にはフォーム記入をもって活動終了だが、年に 1 回の報告交流会や、コースによっては実施している同窓会への参加など、引き続き活動に関わる機会もある。

3　村おこしボランティアが参加者に与える影響

3-1　調査方法

本章では、ECOFF が実施している村おこしボランティアが、参加者にどのような影響を与えているかについて、主に過去の村おこしボランティア参加者への聞き取り調査をもとに、「学びとキャリア」、「人とのつながり」という 2 つの視点から明らかにする。

具体的な調査方法としては、村おこしボランティアの参加者 15 人に対して、オンラインもしくは対面にて聞き取り調査を行った（表 2）。対象とした参加者は、2021～2025 年の間に 1 回以上村おこしボランティアに参加した者であり、うち約半数は複数コースに参加している。調査対象者は、参加者 4 を除いて参加時点で学生（高校生・大学生・大学院生）である。聞き取りは、

・なぜ村おこしボランティアに参加したのか、そのコースにしたのか
・一番印象に残ったこと
・参加して良かったこと
・参加して自分が変わったこと、成長したこと
・地域・世話人、参加者とのその後のつながり

の 5 つの項目を基本とした半構造化インタビューで行っており、特に村おこしボランティアの経験がその参加者にとってどのような意味合いがあったのか、人生の中でどのような位置づけであったのかという点を重視して実施した。

表 2　調査対象者

参加者番号	性別	学年 （聞き取り時）	居住地	出身地	参加コース （年度表記）	聞き取り日	調査形態	備考
参加者1	女	大学1年	大分県	千葉県	江田島（2023GW）	2025/2/4	オンライン	学生支部
					さつま竹島（2023春A）			
参加者2	男	大学2年	愛知県	静岡県	与論島（2024夏B）	2025/3/1	オンライン	
					然別湖コタン（2024春K）			
参加者3	男	大学4年	大阪府	大阪府	然別湖コタン（2024春L）	2025/3/6	オンライン	
参加者4	女	社会人	神奈川県	神奈川県	江田島（2021秋）	2025/3/15	対面	
					屋久島（2021春B）	2025/10/28	オンライン	2回目
					三陸漁場（2025夏B）			
参加者5	男	修士2年	東京都	中国	三宅島（2023夏）	2025/3/28	オンライン	留学生
参加者6	女	大学3年	新潟県	東京都	喜界島（2022春B）	2025/6/17	オンライン	学生支部
					与論島（2024春C）			
参加者7	女	大学3年	神奈川県	神奈川県	与論島（2024春C）	2025/6/19	オンライン	学生支部
参加者8	女	修士1年	北海道	千葉県	屋久島（2021春B）	2025/6/24	オンライン	
					焼尻島（2022夏B）			
参加者9	女	大学3年	青森県	静岡県	三宅島（2023夏）	2025/7/2	オンライン	
参加者10	女	大学4年	埼玉県	埼玉県	神宮寺（2023夏B）	2025/7/15	オンライン	学生支部
					与論島（2023春B）			
					三陸漁場（2024夏A）			
参加者11	女	大学6年	北海道	北海道	喜界島（2023夏B）	2025/7/19	対面	学生支部
参加者12	女	大学3年	東京都	東京都	江田島（2023夏GW）	2025/7/24	オンライン	
					さつま竹島（2023夏A）			
					種子島（2023夏A）			
					屋久島（2023夏A）			
					与論島（2023春A）			
					徳之島（2023春C）			
					悪石島（2024夏A）			
参加者13	女	大学3年	神奈川県	長野県	三陸漁場（2024夏A）	2025/8/9	オンライン	
参加者14	男	大学4年	新潟県	静岡県	与論島（2023春B）	2025/8/11	オンライン	2人一緒に実施
参加者15	男	大学4年	新潟県	秋田県	与論島（2023春B）	2025/8/11	オンライン	

3-2　調査結果と分析

3-2-1　参加者に与える影響

村おこしボランティアに参加した人たちにとって、その参加の経験は、自身の学びとキャリアにどういう影響を与えたのだろうか。また、参加したことは、人とのつながりという点でどういうことをもたらしたのだろうか。本節においては、調査した内容を、「学びとキャリア」と「人とのつながり」の大きく 2 つの項目に分けて分析した。

3-2-2 学びとキャリア

3-2-2-1 知らない地域で暮らす

まずは、参加者の「学びとキャリア」にどのような影響を与えたのだろうか。5つの項目に分けて分析する。村おこしボランティアが実施されている場所には、世界遺産に登録されている「屋久島」や「奄美大島」といったメジャーな地域もあるが、「さつま竹島」や「宝島」など、その都道府県に住んでいる住民さえもほとんど行ったことがないようなマイナーな地域も多く含まれている。そのため、多くの参加者は地域を「認知する」段階からスタートする。以下斜字部分は、参加者の語りである。

一番（良かったこと）はあれだな。然別湖って場所を知れたことかな。参加しなかったら多分だけど一生知らなかっただろうし、行ってなかった気がするから。（参加者3）

参加者には、行きたい地域が初めに決まっていて、その地域に行くための手段として村おこしボランティアのプログラムに参加する人（参加者14・15など）と、村おこしボランティアが実施されている地域の中から日程などを考慮してコースを選んで参加する人（参加者1・10など）がいる。ほとんどの参加者が後者であり、コースを選ぶ段階でそれまで知らなかった多く離島や地域の名前を目にし、調べるきっかけとなっている。

普段行く機会がない人口40人とかの離島で暮らすっていう体験ができたことがすごい大きかったなと思います。 (参加者1)

行った地域の良さを、旅行じゃ体験できない人々の暮らし、当たり前の暮らしの良さっていうか、表面上じゃなく人々の地域の人の温かさとかも含め、その地域のいい空気感を味わえたっていうのは、すごく参加してよかったなっていうふうに思った（参加者10）

数ある地域の中から参加するコースを決めた後は、実際にその地域に「行く」。自ら足を運び、自分の五感で確かめることにより、参加者は多くの気付きを得ている。ある地域の世話人は、「参加しただけで9割成功している」と言っているように、村おこしボランティアに参加する、一歩を踏み出すことが大きな段階となっている。行った先にはさらに、その地域で10日間というある程度の期間「暮らす」ことで、よりその地域を知ることにつながっている。

3-2-2-2　田舎暮らしやボランティアのハードルが下がる

村おこしボランティアに参加し、地域を認知して実際に暮らしを経験した参加者は、その経験を通じて固定観念がほぐされ、田舎暮らしやボランティアへの認識が変化する場合もある。

都会の生活に慣れてると、やっぱものがないと不便じゃないか？みたいな考え方っていうのはあると思うんですけど、意外と暮らしていけそうみたいな。...離島での暮らしのハードルが下がったかなと思います。（参加者 1）

村おこしボランティアは、できる限り地元住民と同じ時間感覚で過ごし、暮らしが経験できるように、事前にスケジュールが組まれておらず、天候や地域住民の都合によってその都度予定が変更される。そのような比較的実生活に近い暮らしを経験することを通じて、参加者 1 のように自分自身の中での田舎暮らしへのハードルが下がる場合もある。

ボランティアっていう言葉に対してもギャップが生まれたというか、こんな楽しめるものもあるんだっていうね。取っつきやすくなったよね、ボランティアに対して。（参加者 3）

参加者 3 や参加者 9 のように、村おこしボランティアが初めてのボランティア経験であるという人にとっては、「ボランティア」というものに対する認識が変わるきっかけにもなっている。ボランティアを大変で自分からはやりたくないものという認識から、自分自身も学びながら楽しむこともできるものとして捉え直している。このように、普段の生活の中で、田舎暮らしやボランティアに対する偏見を知らず知らずのうちに持ってしまっている場合もあるが、経験してみることによって新たな学びを得ている。

3-2-2-3　視野を広げる

田舎暮らしやボランティアという意図的に用意されたもの以外にも、村おこしボランティアの経験を通じて自さらに自身の視野を広げていることもある。

遠くに行くっていう経験をしてなかったので、それを機に、意外と遠くに、自分の知らない世界っていうんですか？に行けるようになったっていうこと（参加者 6）

ECOFF に参加することで、一人での行動範囲がものすごい広がるので。...一人で何でもできるように、高校 3 年生にして。一人で離島まで行く。なかなかしないんで。（参加者

参加者たちは、まず「行動」という面で、視野を広げている。前述したように、村おこしボランティアは旅行でも選ばれないようなマイナーな地域で多く行われていて、これまで自身が訪れたことがないような地域に足を踏み入れることになる。特に参加者 1 や参加者 6 のように、高校生のときに初めて参加した人にとっては、村おこしボランティアの参加が初めての一人での遠出になることも多い。その場合は、行動範囲を広げるきっかけになっており、その経験を自信にして、参加者 1 はさつま竹島や徳之島、参加者 6 は与論島やさつま竹島など他地域への訪問のほか、ECOFF 学生支部への参画、地域インターンへの参加、他の離島への一人旅行などにつなげている。また、参加者 2 のように、最初は一番南の地域に行ってみたい、南の地域に行ったから次は一番北に行ってみたいという理由で地域を選択しているように、訪れる地域を意図して広げようとしている参加者も見られる。

他県の自分が普段絶対に関わりを持たないような、別の地域にいる人と実際に一緒に生活して、関わりを持てたっていうのが個人的にはすごい貴重な経験だったなっていうふうに思います。実際にお話をする中で、その人が住んでいる地域のこととか、自分とは違う大学の学部の話とか、いろんな話を聞くことができて、すごい自分の考えと全く違うこともたくさんあったので、そういったことを知れたのもすごい良かった（参加者 7）

活動に参加するという行動の中で、新たな「考え」を得る参加者も多い。村おこしボランティアには、全国各地から学校での専門や仕事もそれぞれ異なる参加者が集まる。参加者は、日常生活では交わらない世話人をはじめとした地域住民との関わりはもちろんのこと、参加者同士の関わりも通じて視野を広げていることが分かる。

3-2-2-4　コミュニケーション力を鍛える

普段は関わらない人との関わりと通じて、自身のコミュニケーション力の向上を実感している場合もある。

もともと人見知りというか、人に声かけるのすごい苦手で、初対面の人全然しゃべれなくて、学校とかも毎回ドキドキするなっていうのがあって、それを克服したいなと言うか、どうにかしたいなっていう気持ちあったんですけど。ECOFF で強制的にじゃないですけど、どうしても一緒に過ごすよってなると、やっぱり自然と自分から話しかけられるようになったりとか、積極性持てるようになったかなって思います。（参加者 10）

先に述べたように、村おこしボランティア期間中は、地元住民・他の参加者など、初対面

の人と否が応でもコミュニケーションを取ることになる。そのような場に身を置くことで、自然と主体的にコミュニケーションを取るようになる場合もある。また、初対面の人しかいない環境だから自分を変えられることもあると思われる。今までの自分を知っている人がいないからこそ、新たな自分の立ち振る舞いに挑戦ができる。ただし、このような自分自身の変化は、3-2-2-1 から 3-2-2-4 までの学びとは違い、10 日間の中ですぐに変えられるものではない。参加者 4 や 11 が学生生活の数ある経験の中の一つとして村おこしボランティアの経験を位置づけているように、村おこしボランティアなどの学校内外での経験の積み重ねが、自分や周りが気づくような変化をもたらしていると考えられる。

3-2-2-5　将来について考える

学び・キャリアの観点で村おこしボランティアが参加者にもたらしている一番大きな変化としては、将来について考えるきっかけになっていることが挙げられる。

ある程度都市、街のある田舎と、人口がもう数十人の島とみたいな。そういういろんなところに行ってみることで、自分はどういうところが向いてるなみたいな。都会が向いてるっていう人もいるじゃないですか？その人との関わりが少ない都会が向いてるみたいな。私は別にそういうタイプではないけど、自分のタイプを分析した上で、ある程度都市感のある田舎くらいがいいのかな？みたいな。地方都市のちょっと外れぐらいが合ってるのかな？（参加者 1）

参加者 1 の場合は、江田島という陸続きである程度人口規模の多い島と、さつま竹島という週に 3 回しかフェリーがない人口数十人の離島のコースに参加して、意図的に異なる環境を比較している。現地に行ってみないと分からない生活と、その中で見つける自分自身の価値観とを照らし合わせることで、自分が将来どのような地域で暮らしていきたいかを検討している。居住地という人生の中でも大きな選択の一つに対して、村おこしボランティアは影響を与えていると言える。

第一次産業にちょっと興味があって、この夏も農業のインターン行くんですけど、そういう系で進めたらいいなっていうふうに、漠然としかまだ考えてないですけど。食に関係するというか、やりたいなっていう気持ちではいます。…ECOFF 参加して、その気持ち強くなったというか。自然いいなみたいなくらいの程度だったんですけど、生産者というか、自分が作ったもので喜ばせるのってすごい良いなって ECOFF でより思いましたね。（参加者 10）

参加者 10 の場合は、村おこしボランティアへの参加が、自分が考えていた将来の仕事の確認、確信につながってことが分かる。活動内容としては、農業や漁業などが中心であるため、参加者 10 のような第一次産業の分野が中心となるが、ゲストハウスやガイドツアーを経営している世話人の働き方・生き方自体に感化される場合や、期間中に関わる他の地域住民の影響を受ける場合もある。このように、第一次産業のような仕事や、離島で自営業で暮らすというような生き方に興味関心を持たせたり、元々興味関心があった人にとっては、よりその夢や目標を具体化することに影響を与えている。

何が好きで、どういう環境が嫌なのかっていうのが、そこで自分がずっと住んでた場所から離れて、明確になった感じがして...与論島に行って新しいやりたいこともできたし、休学しようっていう考えにも至ったし、本当に世界が広がったなっていうのが一番自分の中に起こった変化かなっていうふうに感じました。（参加者 7）

参加者 7 の場合は、参加者 1 のような居住地と、参加者 10 のような将来の職業選択の両方に影響を与えている。現在住んでいる地域（都市）と活動先の地域を比較することで、自分自身が暮らしやすいと感じる環境を理解するとともに、まだ具体化には至っていないものの将来の選択肢を探そうと行動している。参加者 10 は、その後来年からの 1 年間の休学と、島根県が実施しているプログラム「大人の島留学」への参加を決めている。プログラムのことは、村おこしボランティアの活動中に参加者から聞いて知ったと言い、他の参加者からの影響も受けていることが分かる。

3-2-3　人とのつながり

3-2-3-1　参加者どうしのつながり

続いては、「人とのつながり」という観点での村おこしボランティアが参加者に与える影響について議論する。一口に人といっても、村おこしボランティアの活動中に多くの人と関わることになるが、ここでは参加者どうしのつながりに特に注目したい。

同じようなボランティアに参加した仲間と出会えて、仲良くなれたこともすごい良かった。（参加者 3）

多分今までで一番いい友達ができた感じ。（参加者 5）

参加者に村おこしボランティアに参加して良かったことを尋ねると、多くの参加者が最

初に一緒に参加したメンバーに出会えたこと、メンバーと仲良くなれたことを挙げている。一方で、村おこしボランティアの主目的である「地域について知ること」については、言及されなかったり、次点、次々点の良かったこととして挙げている。主目的ではない収穫であったからという側面もあると思われるが、それ以上に参加者にとって他の参加者との出会いは印象的な出来事であり、大きな意味を持っていることが窺える。

同じ地域の同じ日程の参加者どうしの「よこのつながり」に加えて、コースによってはその地域に参加した歴代の参加者が入っている LINE グループや毎年同窓会のような形でみんなが集まる機会を設けている地域もある。同じタイミングで活動していたわけではないものの、同じ地域に参加した人どうしで「たてのつながり」もできている。さらに「よこのつながり」や「たてのつながり」を越えたつながりもできている。

今回の竹島も友達と一緒に行って。江田島参加した時の友達で、竹島にも参加してた子がいて。その子と、その私は江田島で一緒だった子なんですけど、その子と一緒にツアーの予約して。（参加者 1）

上記は参加者 1 の活動後の参加者とのつながりについての語りである。補足をすると、参加者 1 と友達（=参加者 12）は、江田島コースの同じ日程に参加し仲良くなっている。その後、同年度の夏に参加者 12 がさつま竹島コースに、同年度の春に参加者 1 もさつま竹島コースに参加している。別日程の同じ地域を訪れた 2 人が、別地域での出会いをきっかけに、再度その地域を訪問しているということである。このように、全国各地の地域で毎回の長期休みごとに村おこしボランティアを実施していることからリピーターが多く、一緒にその地域の活動に参加しているわけではないものの、別の地域や場面で出会い、間接的に知り合いになっている「ななめのつながり」ができている。

これら 3 つの村おこしボランティア参加者のつながりが、多層で重なり合い、ECOFF というネットワークができている。年に一度過去の村おこしボランティアの参加者が集う報告交流会は、このネットワークが体現された場であると同時に、ネットワークを強化していると言えるだろう。では、このようなつながり生んでいる要因は何だろうか。3-3-3-2 では、村おこしボランティアのプログラムの特徴から、その要因を考察したい。

3-2-3-2　つながりをつくる要因

① 共通の興味関心

つながりをつくっている要因を 4 つの観点から分析する。最初に挙げるのは、集まっている人の属性という観点である。

結構趣味が似てるというか、みんな割と自然が好きだったりとか、いろんなとこ行くのが好きとかそういう感性というか似てる人が多いので、どっか一緒になんかしようっていうのもしやすい、声かけやすいっていうのもあるかなって思います。（参加者 10）

村おこしボランティアに申し込み後、参加者はコースの日程ごとの LINE グループに招待され、そこで自己紹介をすることになる。自己紹介の項目は、氏名・出身地・大学名といま学んでいること・この活動に参加する目的・自己ＰＲ・現地の方へのメッセージと、自分らしい写真である（参加時期により一部異なる）。参加者は、活動当日に実際に会う前からメンバーのことを知ることができ、熱心な人は事前に全員のプロフィールによく目を通してくる。自己 PR の欄には、自分の好きなことや趣味を多くの人が書くが、「自然が好き」「旅行が好き」という項目を挙げている参加者がかなり多くいる。住む地域も学んでいる専門知識もバラバラの参加者であるが、村おこしボランティアを見つけて参加するという時点でフィルターがかかり、似たような興味関心を持ったような人が集まっている。そのため、事前の自己紹介を通じて共通の趣味嗜好があることを知って会話の種が生まれ、つながりのきっかけが出来やすい環境になっているのだろう。

② ボランティアで行くこと

つながりをつくっている要因のうち、次の 3 つは村おこしボランティアでの環境に関するものである。最初にボランティアという形で地域を訪れるという意味だ。

ボランティアで出会ったからこその距離感で仲良くなれたんだろうなっていうのが。...観光客同士で出会ったとかでもああはならないし、ボランティアだからだよね。（参加者 3）

お金かかるのが嫌とかは特になくて、逆にその少しでもその地域貢献というか、自分が移動することによっても、そのお金が運営先だったり、飛行機会社だったり。...無料だと完全ゲストいうか、アウェイな感じがすごいするんですけど、お金払って行っていることによって、迎え入れられてるけど、こっちも対等にというか、ちゃんと地域の一員として迎え入れてもらえるかなっていう、自分なりの気持ちがありましたね。（参加者 10）

プログラム名に「ボランティア」と入っていることから、概ね目的意識が高い人が自然と参加することになり、観光のようにただ楽しもうという人や、アルバイトのようにお金を稼ぐために時間をやり過ごそうという人は少なくなる。「旅行とは違う関わり方で地域に他の地域に行ってみたい」（参加者 1）、「どうせ行くなら旅行じゃなくて、ちょっと違う形でいきたいな」（参加者 10）というように、そもそも旅行では得られない何かを求めて参加を決めている人も多くいる。地域のために何かをしたいという共通の目的のもと一緒に活動するため、観光やアルバイトとは違った仲間意識が生まれる。近年は、多くの地方自治体が実

施している有償インターンやおてつたび、リゾートバイトなど、学生にとって地域に踏み出すチャンスが多くあるが、ボランティアで行くことにより、参加者どうしや地域の人と関わるチャンスも生まれる。また、参加者はお金を払ってまで来たのだから、何かを得て帰りたい、自分が何かをしたという意識が生まれ、その一つとしての仲間づくりとも捉えられるだろう。同時に地域に貢献しているという達成感も得ている。

③ 共同生活・作業

つながりをつくっている要因として、次に挙げられるのはボランティア中の活動と活動以外の時間についてである。

仲良かったと思うよ、屋久島は。やっぱり共同で作業するってことが多かった、と思うんだよね。話す機会も多かったし、夜自由だったし（参加者 8）

村おこしボランティア中の活動内容は、農作業や漁業など協力して効率的にやるものが多くある。個人で黙々とやる作業が多いのも事実だが、作業に慣れてくれば隣の参加者や地域の方々を雑談しながら手元を動かせるようになってくる。加えてボランティア期間中は基本的に集団での共同生活となるため、自炊や掃除等を分担して行うこととなり、活動以外の時間でも協力せざるを得ない場面も多くなる。特に料理は、数人のグループに分けて当番制で回し、買い出しとお金のやりくり、何をつくるのか、どうやってつくるのかまで、全て自分たちで決めて行うため、話し合って協力する場面が多く、少ないメンバーの中で話す機会にもなる（コースによりやり方は異なる）。また、宿泊を伴う活動のため、活動間の休憩や活動後の夜といった遊びの時間も生まれ、自然と深い話をするような空気感も出てくる。

（トラブルで上陸できなかったことについて）前回喜界島行った時も、船で困ることはなかったので、こういうこともあるんだっていう経験をしました。...もう最初の 1 泊目で仲めちゃめちゃ深まってました。（参加者 7）

村おこしボランティアは、現地集合・現地解散が基本であり、最初の集合場所には世話人がおらず、初対面の参加者だけで集まる場合も多い。離島コースでは、本土側のフェリーターミナルが集合場所になっており、初めてフェリーに乗る経験がない人が多いなかで、チケットを買い、乗船し、コースによっては船の中で夜を明かすことになる。さらに、夏のコースの場合には、台風などの悪天候などでイレギュラーが発生する可能性も高くなる。初めての経験をみんなで助け合いながら乗り越えるという環境がよりつながりを強くしているだろう。

④ 地域という媒介

つながりをつくる要因として最後に挙げるのは、地域という普段とは異なった環境に全員が集まって行う意味である。

出会った初日から参加者の人とすごく意気投合して、学年とかも全然バラバラだったんですけど、初日から初めましてとは思えないくらいの気がすごい楽というか、緊張せずいられたのがすごい不思議で、島の効果かも分かんないですけど、心穏やかにというか、非日常的な感じで、やっぱり離島じゃないと味わえない空気感っていうのをすごい身に沁みて感じました。（参加者 10）

②と③は、他のボランティア活動や宿泊型の教育プログラムでも言えることがだが、村おこしボランティアでは、見知らぬ地域や離島で行うことがさらにつながりの構築を強化していると言える。初めて行く土地、非日常的な離島という環境で行い、初めて会う参加者と活動をするからこそ、新たな気持ちでいつもとは違う自分で頑張ろうという意識が生まれる。

*一緒に自分の住んでいる地域以外、1 つの地域で生活したっていう、家族まではいかないですけど、ちょっと友達とは少し違う、その地域を通してつながれた、その地域に戻ってきたいねっていう気持ちが多分みんな各々あって、それでずっと繋がれているというか、またその地域に戻りたいっていう気持ちが多分 1 つになって繋がっているのかなっていうのもありますし。(*参加者 10）

参加者で再度集まるというグループも多くある。関東の参加者が多い場合は東京、関西・中部の参加者が多い場合は大阪など、参加者みんなが集まりやすい場所で再開するグループが多いが、メンバーが全国に散っている場合は、活動した地域に集まるというグループもある。また、参加者 10 のグループのように、実現可能性は低いと思われるが、現地での再開を約束している人も多い。さらに、参加者 8 の訪れた地域のように、みかんの木を一人一本植樹して、実が成る 2〜3 年後にまた来てくださいなど、再訪を促している地域もある。このように、参加者にとっては、他の参加者との思い出が過ごした地域とともに心に刻まれる。地域という集まる場所があるからこそ、参加者どうしのつながりが促進されているのではないだろうか。

3-2-4 まとめ

第 3 章では、「学びとキャリア」と「人とのつながり」という 2 つの観点から、村おこしボランティアが参加者に与えている影響について分析した。まず、「学びとキャリア」とい

う点では、地域を認知し暮らすことが、参加者の田舎暮らしやボランティアへの参加といったものに対するハードルを下げ、行動範囲や考えを広げていることが分かった。また、初対面の地域の方々や他の参加者との交流を通じてコミュニケーションを向上させたり、自身の将来の居住地や職業の選択に影響を与えていることが分かった。「人とのつながり」という点では、特に参加者どうしのつながりが村おこしボランティアの中では意味を持っていることが分かった。参加者のつながりができているのは、共通の興味関心がある参加者が、ボランティアという形で現地に行き、共同生活・作業を行っていることが要因であり、そのつながりを強化しているのが地域という集まる場所があることだと言えるだろう。

4　村おこしボランティアの世話人に与える影響と NPO の果たす役割

4-1　村おこしボランティアの世話人に与える影響

3 章においては、村おこしボランティアに関わる人々のうち、特に参加者に与える影響について検討した。村おこしボランティアではその他に、受け入れ地域のサポート役である世話人と NPO の代表も関わってくる。そこで本章では、村おこしボランティアの世話人に与える影響と ECOFF が参加者と世話人との間で果たしている役割について補足的に考察する。

前述したように、受け入れ地域で参加者のサポートを行う人が村おこしボランティアでは世話人と呼ばれている。世話人は 1 人の場合もあるが、生活全般のお世話と日中の活動のお世話で分担するなど 2〜3 人が協力して受け入れを行っている場合や、夫婦や親子など家族全体で受け入れを行っている場合も多い。また、基本的に世話人も普段の仕事のかたわらで受け入れを行っているため、10 日間参加者に付きっきりでサポートをすることは難しい。そのため、世話人の他に近所の農家や飲食店従事者などの協力も得て実施することになる。参加者側も「地域の人々との交流」を重視している人も多いため、世話人以外の地域の人の活動への関わりは双方ともにメリットである。宮坂氏によれば、村おこしボランティアの受け入れを通じて、世話人は受け入れをサポートしてもらう地域の人と関わる機会となり、特に移住者の世話人にとっては、地域の人との信頼関係を築くきっかけになっているという。

加えて、村おこしボランティアの受け入れは、世話人が普段は関わることが少ない若い世代と関わる機会となっている。ある世話人は、関わりを通じて、学生にとっての大きな思い出をつくり、人生に影響を与えることができるという点でやりがいを感じている。

> *非日常な時間や体験に溢れた 10 日間は、学生にとって心を大きく揺さぶります。揺することで、自分の心が少し見えたりします。滞在中に多くの学生が、自分と対話し、涙を流します。奥尻島での時間が「心のお守り」となって、これからの人生を歩んでいってくれると嬉しいです。*[4]

また別の世話人は、学生の受け入れを通じて、「知らないことを知れて刺激になる」と話している。参加者が全国から集まり、学んでいることもさまざまという点は、参加者どうし

[4] 奥尻ゲストハウス imacoco ブログ【なぜ大学生ボランティアを受け入れ続けているのか】
https://okushiri-imacoco.com/%e3%80%90%e3%81%aa%e3%81%9c%e5%a4%a7%e5%ad%a6%e7%94%9f%e3%83%9c%e3%83%a9%e3%83%b3%e3%83%86%e3%82%a3%e3%82%a2%e3%82%92%e5%8f%97%e3%81%91%e5%85%a5%e3%82%8c%e7%b6%9a%e3%81%91%e3%81%a6%e3%81%84%e3%82%8b（2026/1/8 最終閲覧）

だけでなく、世話人にとっても一つの大きな意味を持っていると言える。さらに、受け入れを通じた築く関係性についても言及がある。

> *多くの学生が、その後も奥尻島を何度も訪れ、大きな声で「ただいま」と言ってくれます。僕たちも大きな声で「おかえり」と迎えます。この瞬間のために、10 日間命を燃やしていると言っても過言ではありません。…受け入れを始めて、たった 5 年ですが、すでにお金では買えない「家族のような関係性」があります。*[4]

「人とのつながり」という点に村おこしボランティア受け入れのやりがいや魅力を感じている点は、世話人も参加者と同様である。別の世話人も「受け入れは大赤字だが、長い目で見ればプラスになる」と言っているように、若者との長期的なつながりに重きを置いていることが分かる。プログラム後に地域を訪れる要因として、地域で出会った「人に会う」ためということが大きいと先行研究で指摘されているが（藤崎 2010；泉・佐々木 2018）、村おこしボランティアにおいても同じことが言えるだろう。参加者も世話人も「人とのつながり」を重視して活動しており、互いの働きかけによって親密な関係性を築き、再び出会う日を待ちわびている。地域を再訪するという点において、地域にとっては関係人口を生み出していると言える。

以上のように、村おこしボランティアは世話人にとっても地域の人々や参加する若者などとの「人とのつながり」を築く一助になっている。また、学生とのかかわりを通じて、人の人生に影響を与えることができるという点でやりがいを感じていたり、新たな知識を得て刺激になるというような点で世話人自身の学びになっていると言える。

4-2　村おこしボランティアにおける NPO の果たす役割

NPO 法人地域緑化センターが実施する緑のふるさと協力隊においては、隊員の応募動機やその人の特徴の把握と、派遣地域への職員の事前訪問を通じたマッチングが重要だと指摘されていたが（山岸 2022）、村おこしボランティアにおいてはやや異なる。緑のふるさと協力隊同様に、NPO 代表や学生支部が受け入れ前に地域を訪れ、世話人候補者の考えや宿泊先の環境の確認などを行っていて、これによって NPO としての方向性の統一や受け入れ先の質の確保を図っている。一方で、参加者と NPO 関係者との信頼関係の構築には重きが置かれていない。参加者が NPO 代表と話す機会は基本的になく、事前オリエンテーションにおいて NPO 代表が説明する動画を視聴するにとどまる。また、マッチングについても、自分から申し込みをすれば NPO 代表と話をする機会は設けられるが、基本的にはホームページに記載されている情報や口コミなどから参加者自身が参加する地域を選択することになる。これは、受け入れ先の数や参加者数の規模が大きく、日数も長くても 10 日ほどと短

いことが関係していると考えられる。信頼関係の構築という点は、各地域の世話人が担っていて、だからこそ各地域の世話人や地域の色が出ていると考えられる。NPO としては、30 を超える全国の地方地域の情報を発信しており、プラットフォームとして大きな役割を果たしている。地方創生やボランティアに関心のある学生を多く取り込み、多数の地域で実施することで、再び他の地域に出向くきっかけをつくっていると言える。

都市と地方の人々をつなぐ役割としては、先述した緑のふるさと協力隊のように、少数の人々と信頼関係を築き、参加者と地域とを慎重にマッチングする役割や、おてつたびのように数として多くの地域を掲載し、間口を広くたくさんの人々へアプローチするプラットフォームとしての役割が考えられる。ECOFF では、両方の役割をバランスよく担っていると言える。しかし、それによって実質 10 日間を参加者と過ごすことになる世話人の負担は大きくなるようにも思われる。

5　結論

本研究では、都市と農山漁村の人々をつなぐ取り組みが人々にもたらす影響について、村おこしNPO法人が実施している「村おこしボランティア」を事例に、主に参加者の視点から検討した。参加者は、村おこしボランティアに参加し、現地での暮らしや世話人をはじめとする地域の方々や他の参加者との交流を通じて、自身のコミュニケーションを向上させたり、将来の居住地や職業の選択について考える機会を得ている。また、共通の興味関心がある参加者がボランティアという形である一つの地域を訪れ、共同生活・作業を行うことで、参加者どうしのつながりが醸成されていること分かった。さらに、世話人にとってもやりがいや新たな学び、地域の人々や参加する若者などとのつながりを得る機会となっている。参加者と世話人の2者の間にはNPOの存在があり、参加者に数多くの地域を紹介しつつも、学びや生活環境の質も担保している。参加者にとっても、地域の世話人にとっても、今後も関係性を継続したいと思えるような「人とのつながり」をつくっているという点が、村おこしボランティアがもたらしている大きな影響であり、この活動の意義であろう。そのつながりを通じて、地域にとっての関係人口を生み出すということにも寄与していると言えるのではないか。

本研究は、村おこしボランティアの参加者にフォーカスを当てたため、世話人や世話人に協力する地域の人々、しいては受け入れを行う地域全体に与える影響については、十分に調査・考察できなかった。継続的に関係人口を生み出すような環境をつくるためには、都市と農山漁村の双方にとって無理のなくWin-winな関係を築くことが必要だろう。今後機会があれば、活動に関わる全ての人にとっての影響を踏まえて、より深く考察していきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方にお世話になりました。この場を借りて心より感謝申し上げます。指導教員である地域科学研究室の宮内泰介先生、林琢也先生には、研究の計画の段階から、論文の執筆まで多大なご指導・ご鞭撻を賜りました。親身になって導いてくださったことに大変感謝いたします。また、村おこし NPO 法人 ECOFF 代表の宮坂大智様、ECOFF 学生支部のメンバーをはじめとするインタビューに答えてくださった皆様のご協力により、本研究を進めることができました。本当にありがとうございました。

本研究にかかわってくださったみなさんのご支援・ご協力のおかげで、修士論文を無事完成させることができました。改めて、深く感謝申し上げます。

2026 年 1 月 8 日

佐々木 健

参考文献

- 増田寛也（2014）『地方消滅：東京一極集中が招く人口急減』中公新書
- 山下祐介（2014）『地方消滅の罠：「増田レポート」と人口減少社会の正体』ちくま新書
- 高橋博之（2016）『都市と地方をかきまぜる：「食べる通信」の軌跡』光文社新書
- 指出一正（2016）『ぼくらは地方で幸せを見つける：ソトコト流ローカル再生論』ポプラ新書
- 田中輝美（2017）『関係人口をつくる』木楽舎
- 田中輝美（2021）『関係人口の社会学：人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会
- 藤崎浩幸（2010）「山村留学後の留学生と里親の交流実態―秋田県旧 A 町 M 学園における事例調査」、『農村計画学会誌』29：168-172
- 泉桂子・佐々木南美（2018）「緑のふるさと協力隊 OB・OG と派遣先農山村との関わり―東北地方を事例として―」、『東北森林科学会誌』23：51-56
- 川見亮介・後藤春彦・佐久間康富（2010）「都市農村交流における「地域づくりインターン事業」派遣期間終了後の再訪に関する研究」、『日本都市計画学会 都市計画論文集』45-1：1-7
- 田原洋樹・敷田麻実（2023）「交流人口から関係人口への変容可能性の検討―観光経験による関与意識醸成と地域への継続的な関わり意向との関係―」、『観光研究』34-2 ：49-64
- NPO 法人地域緑化センターホームページ https://www.n-gec.org/index.html（2026/1/8 最終閲覧）
- 飯干宏充（2022）「緑のふるさと協力隊を受け入れて―意味と地域に与える影響―」、『農村計画学会誌』41-3：140-141
- 山岸貴生（2022）「地域と若者をつなぐ―1 年間ボランティア「緑のふるさと協力隊」

の 29 年―」、『農村計画学会誌』41-3：138-139
- 橋本文子（2018）「農村と若者をつなぐには― 中間支援組織の役割―1 年間の地域貢献活動 「緑のふるさと協力隊」 を事例に―」、『農村計画学会誌』36-4：508-511
- 山本俊光（2017）「子ども向け宿泊型農業体験プログラムに参加した若者の社会性」、『甲子園短期大学紀要』35：9-16
- 有川かおり（2020）「大学生の企画力・実践力を育む教育プログラムの実践と評価―導入教育段階でのイベント企画の効果と課題に関する検討―」、『聖徳大学研究紀要』53：41-48
- 須賀由紀子（2023）「大学の地域連携のあり方を考える ―持続的農村発展と都市部学生の関係づくりから―」、『実践女子大学 生活科学部紀要』60：9-19
- 村おこし NPO 法人 ECOFF ホームページ https://ecoff.org/（2026/1/8 最終閲覧）
- 奥尻ゲストハウス imacoco ホームページ https://okushiri-imacoco.com/（2026/1/8 最終閲覧）